

4. 研究会「講師」からの思い出と祝辞

祝 100 回
祝 100 回記念滝野 嗣久 (第 33 回例会講師
ARC 高齢社会研究会)

貴研究会が 100 回を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。私も第 33 回の例会で「在宅勤務の近況」について報告させていただきました。

その時、参加された方々のチームワークの良さと真剣な眼差しを印象深く記憶しております。

貴研究会の活動が、ハンディキャップを持った方々やご家族に勇気を与えて、生活の質の向上に貢献されたことは大変意義が深いと感心しております。

私どもの「旭リサーチセンター (ARC) 高齢社会研究会」では、森山会長夫妻のお話を頂い

たり、東京都が主催した「東京アワーズ」では森山会長の体験をベースに「障害者の生活環境のバリアー」をテーマに、パネルを展示いたしました。いつも、格別のご協力を頂き深く感謝しています。

これからは、社会保障費の抑制に向けて「療養病床の削減」を始めとして、障害者施策の切り下げが相次ぐと予想されます。ハンディを持ったご本人やご家族を取り巻く環境を改善するために声を上げることが益々必要になってまいります。

貴会の更なる発展を心からお祈り申し上げます。

祝 100 回
手 紙中溝 英夫
(第 38 回例会講師 会社員)

皆様、ご無沙汰しています。私にご縁があつて第 38 回の例会で「MY3KM」のお話をさせていただきました。

平成 15 年に思いもかけぬ大病を患い、約 2 か月の入院生活を送り、家族や会社に迷惑と心配をかけてしまいました。

「なぜ、自分がこんな病気に罹らなくてはいけないのか」と、入院生活中は鬱々とした日々を過ごしましたが、一日も欠かさぬ妻の見舞いに励まされ、どうにか退院の

日を迎えたときは感激もひとしおでした。

人は順調な時はどうしても感謝の気持ちを忘れがちです。今回の病気で改めて「家族」の大切さを認識しました。残された時間を自分ひとりだけでなく家族と共に充実したものになりたいと思っています。今は病も順調に回復して職場に復帰しています。これからも世の中の役に立ちたいと思っています。